

---

# 悪魔のおせっかい {修}

北町 スイテイ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

悪魔のおせつかい 〔修〕

### 【Nコード】

N8232R

### 【作者名】

北町 スイテイ

### 【あらすじ】

浅野健一あさのけんいちは、今年から魔法学園セイスに通う15歳。ごく一般的に見える彼だが、そんな彼には、とても重大な秘密が……。目立つことが嫌いな健一がドンドン目立っていく、ちょっとシリアスなコメディです!!。

## プロローグ(前書き)

ごめんなさい。20日を過ぎてしまいました。  
お詫びに今日は2話連続投稿します。短めですが、これから努力していくのでよろしく願います。

## ブローグ

く?????

ppppp

機械的な電子音が鳴り響く室内。俺の耳は、さっきから鳴り響いている目覚まし時計のアラームで奥のほうでジンジンしている。俺はこの音が好きじゃない。別に特別理由があるわけではないが、なんと言つか、心地よい夢の時間の終わりを告げるあの音が好きな人はいないと思う。おまけに今日はお袋が俺の入学祝いに送り込んできた特注の大音量の目覚まし。俺が入学式に遅れないようにお袋が用意してくれたのはわかるが、いかんせん、俺は朝にすこぶる弱い

『すまないお袋、俺は朝に敗れました』

心の中でお袋に謝り、心地よいまどろみの中に沈んでいく

ppppppp.....

鳴り響いていたアラームも止み、心置きなく眠ろうと思っていたときにそれは起こった。

カ、カカカ、カク

おかしな音がしているとは思っていたんだ

でも

あんなことが

起こるなんて

『起きろ！！健一！！』

「今起きます！！」

突然親父の声が鳴り響き、俺はあわてて飛び起き綺麗な敬礼を決めた。親父の朝の成敗の怖さは俺が一番よく知っている、というか身をもって体感していた。

しかし、そこにいると思っていた人はいなかった。代わりにあったのは目覚まし時計。

.....!  
?

お袋か.....

## プロローグ 2

俺の名は 浅野<sup>あさの</sup> 健一<sup>けんいち</sup> 赤い髪にメガネくらいしか特徴のないぴちぴちの15歳だ。そんな俺は今日から魔法学園セイス通うわけだが、なにぶん俺は寝起きが悪い、おまけに学園に入るのが決まってるに一人暮らし、俺が起きられるわけがない。そんな俺のためにお袋は目覚まし時計を入学祝いにくれたわけだ。

しかしまあ…

これはないと思う。

確かに朝に弱くて起きられないのは俺のせいだ。しかし、だからってこんなデカイ親父の声を入れることはないのに…こまったお袋だ。でも、許せてしまう。だって俺はあの二人に返しきれないほどの恩を受けたから。

入学式まではまだ時間がある、俺はゆっくりと制服に着替えながら、昔の思い出に思いをはせた。

（9年前）

降り注ぐ雨が冷たい、もう何時間も地面の上で倒れこんでいる。もう指一本動かすことはできなかった。処刑されかけたんだ。血まみれで、汚くて。でも、目的は果たした。

このまま俺は死ぬ。

それでもいいと思った。彼女を救えた。ただそれだけの事実で俺はもう満足していた。それにもともと死ぬつもりだったんだ。こうやって生きていくことのほうが俺は不思議だった。

でも…ただひとつだけ、彼女に嘘をついたことだけは後悔していた。最後に俺に彼女が向けたあの顔が忘れられなかった。たとえ彼女が何も知らなかったとしても、そのほうが幸せなのだ。彼女が好きな



のは『俺』じゃない。俺じゃないんだから。

意識が朦朧としてきた。こんな何もなところに誰かが来るはずはない。後はタイムリミットを待つだけのはずだった。

「あらあら、こんなところでお昼寝？」

綺麗な声が聞こえた。まるで鈴のような声だった。

俺のこんな姿を見て、のん気に声をかけてきたのは、若い女だった。その後ろには同じく若い男。

「どうした、サナ」

どうやらこの女はサナというらしい。サナは俺の事をじっと見ている。そして聞いてきた。

「何してるの？」

「寒くない？」

「家族は？」

サナは多くの質問をしたが、俺はどれにも答えなかった。唯一つの質問を除いて。

「帰る場所は？」

「……………も、う…ない……………」

どうして答えたのかは解らない。もしかしたら本当は悲しかったのかも、でも、俺にそんなことはわからない。彼女以外に感情を持たることがないから。

答えた声は本当に小さくて、雨の音にかき消されたかもしれない。でも、サナは、『お袋』は聞き取ってくれた。やさしく微笑んで。

「じゃ、うちの子になりましょう」

そう言ってくれた。

## プロローグ2（後書き）

これからちまちま頑張りますよ！。  
前よりも丁寧に頑張ってみただけど、どうでしょう？感想楽しみにしています。

河野(かわの) 鳴海(なるみ) (前書き)

前とは少し違います。

河野（かわの） 鳴海（なるみ）

（健一）

それから9年、俺は二人の暖かさに支えられて生きてきた。はじめのうちは何かに付けてかまってくるお袋を、煙たがったが。1年2年過ぎすうちにそんなお袋のおせっかいも気にならなくなった。

親父の頑固には本当に困った。おかしな話だが、この俺がまるで子供の喧嘩のように親父とぶつかり合ったのだ。おかげで少し人間くさくなったのではないかと思っている。心も体も…。

しかしそういうときに『やはり自分は違うんだ』と思い知るのだ。

俺は、優しい気持ちかわからない。嬉しい気持ちかわからない。悲しい気持ちかわからない。『人間』と『俺たち』との決定的違い。心かわからない。

知識としてはある。どんなときに感じるか。どうしてそう感じるか。何でそう感じるか。

しかし、それでも足りない。どんなに知恵を絞っても、それを『ココロ』で感じる事ができない。わかるのは、激しい破壊への欲求、殺人衝動、それに対する狂おしいほどの満足感、いや、快感といったところか。

暗い話になってしまったが、とりあえず俺はお袋と親父に感謝している。本当は二人に恩返しをしたかったが、親父が

「おまえには、魔法の才能がある！」

とって、希望校の欄に『魔法学園セイス』と書いてしまった。それも提出の直前に。そのまま俺は才能を認められて学園に入学することになったわけだ。

俺はこれからどうなってしまうのだろうか…と玄関を開きながら思う。

鍵もかけたし、電気も消した。この馬鹿でかい家の中で使うのはリビングと寝室ぐらいだから平気なはず。

言い忘れたが、俺の両親はかなりデカイ財閥だ。表には出ないから金持ちの中でしか名前は聞かないと思う。裏社会のリーダーとでも言っておこう。

おかげでメイドを付けさせられそうになったのはまた別の話だ。

「ケン」

突然だが、俺の悩みは尽きない、家のこともそうだが、この学園に

行くにあたっての一番の問題がある。俺の幼馴染、河野かわの 鳴海なるみをど  
うするかだ。

「ねえ、聞いてる？」

あいつは、男ならず女までもが思わず振り返る美少女だ、鳴海が居  
る限り俺に平穏な生活は来ない。そもそもなぜあいつは俺に付きま  
とうんだ。ちゃんと自分の姿が人目を引くと自覚しているというの  
に…。

あれか、あいつは俺をいじめたいんだな。

そうに違いない。あいつとは俺が学校に通い始めてから七年間の付  
き合いになる。

「…ケン、いい度胸ね」

その間の思い出で、俺は鳴海にやさしくされた思い出がない。事あ  
るごとに殴られる、蹴られる、拳の果てに魔法をぶっ放される。  
俺が今まで生きていられたのは奇跡なんじゃないかと数少ない友人  
は言う。

「私を無視しようなんて……」

そんなこともあって、俺に鳴海が付きまとうのは、俺をいじめたい  
からという結論に至った。

今更だが、さつきからまわりの同じ学園生徒らしき奴らが俺のほう  
を見ては、血相を変えて早足で進んでいく。一体どうしたんだろう  
か。中には若干可哀想な者を見る目で見てくる生徒も居る。

この時点で俺は気づいて置くべきだったのかもしれない。

俺の後ろに………

鳴海<sup>オニ</sup>が居たことに

「百年早いのよ!！」

「ぐウフア!！」

気付いたら

俺は空を飛んでいた。いや、吹き飛ばされていたと言ったほうがい  
いだろうか。あごも痛かった。何の魔法も感じなかったことから、  
これは人間の身体能力から引き出された力というのが解る。こんな  
化物じみたことができる奴を俺は一人しか知らない。

「私を無視するからこんな目にあうの。少しは頭を冷やさない」

俺が最後に見たのは、仁王立ちで俺を見ている、鳴海の姿だった。  
それを確認すると俺の意識は静かに沈んでいった。

余談だが、このとき鳴海の最後の言葉に対して

頭を冷やすどころか、むしろ打たれたあごが熱いと思った俺だった。



河野（かわの） 鳴海（なるみ）（後書き）

感想待っています。ちなみに駄目だし、誤字脱字の指摘も待っています。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8232r/>

---

悪魔のおせっかい {修}

2011年7月8日23時49分発行